

第2分科会

学生同士の支えあいを促進し、コミュニティを元気にする学生支援 —学生の居場所としてのピア・サポート—

報告者

内野 梓司 (広島大学 保健管理センター 准教授)

森 孝宏 (京都教育大学 保健管理センター 教授)

河村 秀明 (同志社大学 学生支援機構 学生支援センター 京田辺校地学生支援課 学生支援係長)

木原 章 (法政大学 経営学部 教授 学習ステーション長)

コーディネーター

内田 利広 (京都教育大学 教育学部 教授)

参加人数

57名

学生が主体的に学び、取り組んでいく際に、学生同士の支援というものは大きいと思われる。つまり、大学全体のコミュニティに、お互いを支えあって、学びあおうという雰囲気があることによって、学生生活は、より充実したものになると考えられる。最近の学生は、意欲を失い、大学での人間関係に躊躇、場合によってはひきこもりになってしまうケースが多くなっている。学生支援においては、できるだけ早い段階から、学生同士の支えあいのシステムを構築し、場合によっては、少しホッとできる「居場所」を用意しておくことが、学生の安心感になり、より充実した学生生活につながっていくと考えられる。

そのような視点から、各大学におけるピアサポートの取り組みを通して、学生に対し、どのような支援が可能であり、また居場所を提供できるのかについて、検討していきたい。さらに、どのようなサポートシステムが、大学全体のコミュニティとして、どのように位置付けられ、大学全体の活性化につながっているのかについて、理解を深めたい。

〈第2分科会〉

学生同士の支えあいを促進し、コミュニティを元気にする学生支援 —学生の居場所としてのピア・サポート—

1 本分科会のねらい

学生が主体的に学び、取り組んでいく際に、学生同士の支援というものは大きいと思われる。つまり、大学全体のコミュニティに、お互いを支えあって、学びあおうという雰囲気があることによって、学生生活は、より充実したものになると考えられる。

その一方で、最近の学生は、意欲を失い、大学での人間関係に躊躇、場合によってはひきこもりになってしまふケースも多くなっている。学生支援においては、できるだけ早い段階から、学生同士の支えあいのシステムを構築し、場合によっては、少しホットできる「居場所」を用意しておくことが、学生の安心感になり、より充実した学生生活につながっていくと考えられる。

そのような視点から、各大学におけるピア・サポートの取り組みを通して、無気力や発達的な課題のある学生に対し、どのような支援が可能であり、また居場所を提供できるのかについて、検討していきたい。さらに、どのようなサポートシステムが、大学全体のコミュニティとして、どのように位置付けられ、学生全体の充実につながっているのかについて、理解を深めたい。

2 報告の概要

第1報告者（内野悌司先生）：広島大学におけるピア・サポート活動について、まずピア・サポートの設置に経緯について、丁寧に報告していただいた。その中で、ピア・サポートの起源や大学におけるピア・サポートの考え方、またカテゴリ分けなど、ピア・サポートの理解や活動を行っていく上で、非常に重要な基本的な考え方について、説明していただいた。また14年にわたる広島大学での活動について、その初期の頃の課題や、それをどのように克服し、新たな活動の展開をしてこられたか、さらにピア・サポートの養成システムの構築など、ピア・サポートを行っていく上で、非常に示唆に富んだご報告を頂いた。最後に、ピア・サポート活動における難しさとして、「相談にのることの難しさ」と「プログラムを維持することの

難しさ」の2点を指摘され、今後の活動における課題をあげていただいた。

第2報告者（森孝宏先生）：京都教育大学におけるピア・サポートの取り組みについて、先生自身の学生指導における実感から報告いただいた。つまり、他の大学に比べ、中途退学者の割合が多く、その背景として単位僅少や休学に至る学生がいるが、そのほとんどの学生は、森先生が専任としておられる保健管理センターの健康相談やカウンセリングに相談にきていないということであった。そこには、相談というもののイメージや、やや年齢の離れた大人への相談にくさもあるのではということから、同世代である学生同士の支え合いを中心としたピア・サポートのシステムを作るきっかけになった。初年度、心理学に関心のある学生に呼びかけて、12名の学生にサポーターのための研修を実施した。そして、学生会館の一角にベースを設けて、ピア・サポート活動をスタートしたが、なかなか学生が訪れにくいということで、試行錯誤の中で、今ではオープンなスペースになっているということである。報告では、実際にピア・サポート活動に参加している大学生2名、大学院生1名にも、実際の活動の様子や、これまでに感じた体験談などが話された。なかなか学生が来なかつたり、どのように呼びかけたらいいかと戸惑つたり、と苦労も多かったが、その中から得たものも多くあり、今後の活動に活かしていきたいということであった。

第3報告者（河村秀明様）：同志社大学における「ピ



ア」サポート制度の概要と導入後10年間にわたる活動の成果と課題について、報告していただいた。同志社大学では、平成16年度に、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択されたことから、スタートすることになる。その背景には、国際化、情報化の流れの中で、縦横の人間関係も希薄化し、他者との触れ合いや葛藤を通じた精神的な成熟という点で困難を抱えており、それは当時の自治会選挙における投票率の低下からも窺い知ることができる。このような状況の中で、学生支援のための「学生支援センター」が設立され、さらに学生部と統合し、学生支援・学生の自立支援のための「学生支援センター」が動き出すことになる。ピア・サポート活動を行っていく上では、事務職員の関わりは非常に重要であり、またそれをどの部署が担当するかということも大切であり、同志社大学の場合は、その組織を再編し、学生支援センターがその中心となって進めていった。当初は、学内でもなかなか理解されず、苦労されることもあったようであるが、次第にピア・サポート制度も定着していき、他大学からの問い合わせや視察などもあり、反響も大きかった。しかし、その後、大学キャンパスの再編により、文科系学部と理科系学部が二つのキャンパスに分かれることになり、これまで築きあげてきたピア・サポート制度も、変革を迫られているということであった。

第4報告者（木原章先生）：法政大学における学生スタッフの立ち上げを中心として、これまでの大学において、やや緊張関係にあった学生コミュニティと大学コミュニティの間に、第3のコミュニティを創り出すことをねらいとし、ピア・サポート・コミュニティの提案ということで、学生支援GPとしてスタートしている。新たに作られたコミュニティとして、課外活動プログラム、エンパワーメント、ボランティア支援、障がい学生支援、同郷会、キャリア支援、ピア・サポートといった、いくつかのプロジェクトが考えられた。特にピア・サポートについては、第3のコミュニティとして、「サークル化せず、業務化せず」ということを重視した支援のあり方を模索していっている。つまり、業務性を担保しつつ、効率化しないプロセスの確保が目指されている。さらに、ピアによる支え合いを学修支援にも取り入れようということで、学習ステーションが開設されている。学習ステーションでは、「学びの出会い」というコンセプトで、学部を超えた学びの場を作ることで、幅広い学びのきっかけ作りが目指されている。さらに、ピア・

ネットという形で、学内の複数の部局の連携を図り、支援体制を一本化することで、スケールメリットを引き出している。

3 報告に対する質疑応答

午前中の報告者については、質問用紙を配布し、午前の部が終わった時点で回収し、各報告者より回答していただいた。ここではそれらの中で、全体に共通する代表的な内容について、各報告者の回答をまとめて報告する。

・組織的な位置づけについて（規程について・学内組織上の位置づけ、教職員の位置づけ）

学生支援センターのセンター長（副学長）を中心として、室長、専任教員がおり、規定は作成している。ピア・サポートしての活動の評価も行っている。また、新たに立ち上がったプロジェクト組織では、その計画書に示された内容が組織であり、規定等にもなっている。

学内の組織的な位置づけで、いくつかの事務組織間で齟齬が生じる場合があるが、そこはまずお互いに学生支援ということで、話をするしかなく、対面のコミュニケーションを大事にして、説明を繰り返す中で理解してもらうしかない。

・ピアサポーターについて（参加をどのように呼びかけているか。確保のためにどのような工夫を。資質や適性は考慮するか）

ほとんどの大学が、自らサポーターとして応募してきた学生が中心であり、そのために共通科目等の授業で広報を行っているが、応募者はそれほど多くなく（10名前後）。なかなか有効な方法はないが、口コミが一番有効である。あそこで行って、ピア・サポートに関わると、いいことがあるという話が伝わると、広がっていく。また、掲示等を出して広報したり、昨年度参加してくれた学生にメールして、新たに紹介してもらったりしている。資質や適性の考慮については、基本的には応募してくれた学生は受け入れるが、応募書類を書いてもらい、気になる学生には、面談をして確認する場合がある。

・学生がピア・サポートを受けることについて

サポートを受ける側にとって、そういうところで行くことで、レッテルを張られるような、気持ちになることがある。また、本当にサポートが必要な人に、支援の手が届かないという実態もあるが、それでも、そういうものがあるというのを発信し続けることが大切である。とりあえず敷居を

低くして、学生に来れるかなという認識を持たせるような、工夫が必要である。

自主的に来れない学生にどう手を差し伸べるか、が重要である。図(内野)に示しているように、様々なレベルの支援があり、その中で困った時に同じ学生の目線で、話を聞いて、場合によっては、より専門性の高い場所へつないでいく。

何でも相談窓口として、学生支援課の専任職員がまず話を聞いて、気になるようであれば、カウンセリングセンターへ紹介する。学生支援課も、できるだけ来やすいように、ローカウンターにして、ラウンジも設けている。入学の一時受付(2月)の際に、何度も相談室の紹介を行っている。また新学期が始まって、学生生活導入の授業でも、一コマ分を使って、学生支援(ピアサポート)について説明を行っている。

・どのような学生が、参加しているか。また参加することのメリットは何かあるか

以前は教育学部が多かったが、今は工学部が多い、教員志望から心理、法科大学院に進む人など、さまざまな学部から参加している。また、参加した学生たちの進路はすごく順調であり、人を支援するのは責任がかかるので、それをうまくやっていけるということは、社会人としても力があるのではないかと感じる。

企業でもピア・サポートをやっていたということで、コミュニケーション能力が非常に高く評価される場合がある。ただ、学生によっては、向き・不向きがあるので、かなり高いレベルの課題を与えて、どのように対応するか、守秘義務等について十分に理解しているか、を確かめて、しっかりと指導していくようにしている。研修はしっかりとしており、その中で、チームビルディングについて、説明している。

さらに、参加した学生の中には、就職が決まらない子がいて、そのような学生は、他の周りの



フォーローに回って、お世話をすることが多い、自分のことについて自己主張に欠ける学生がたまにいるので、自分でやってやろうという意識が少し乏しい時がある。

・ピアサポーターとの関わりにおいて、主体的に関わってもらうために意識していること

サポーターがバーンアウトしてしまわないようになることが大切である。また自分の問題意識を少し整理して、学生自身が混乱しないように、また難しい課題に対応できるように、研修をしっかり受けてもらう。

教員がいることで、受け身的になっているので、自分たちで自ら企画を考えてもらうようにし、それをもとに、次年度のピア養成のプログラムに取り入れたり、カフェ形式の相談も実施している。さらに、学期の終わりには、慰労会をやったり、食事を持ち寄って追いコンをやったりしている。また様々な企画の幹事を交替でやってもらう。学生が学生のためにいろいろな体験をすることで、学ぶことが多く、学生自らがピアサポートルームの未来像を考え、提案してもらえるようになると、主体的に動けていけるのではないかと考える。

あまりこちら(教職員)が言い過ぎない、ピアサポーターのできる範囲を明確に伝えておくが、それ以上はあまり言わないようにする。ピアの中のリーダーに伝えて、そこから伝えてもらうようにして、全体にこちらから伝えることは、あまり言わないようにしている。

・ピア・サポーターの有償・無償について

学修支援のとしてのサポーター、新学期のオリエンテーションでのサポーター(ピアアドバイザー)、特別支援に関わるサポーターなど、時間を拘束し、必ずそこにいてもらうような活動では、有償の場合がほとんどであるが、ピア・サポーターに関しては、有償の大学と無償の大学とあった。無償の大学については、これはあくまでも学生同士の同じ立場で相談を受けるので、有償にすると本来の目的とは違う意図で入ってくる人がいるのではという学生の意見があり、無償で行っている。ただ学生の様子を見ていると、有償・無償でそれほど違いはないのではないかと感じている。

・ピア・サポートを実践している学生への質問

・お昼と一人で食べている学生をどのようにサポートしているか?

一人で食べているからと言って、課題があると

いうわけではなく、学生の数も少なく、一人で食べても、それほど気にならない。談話室で、一人でいる学生には、声をかける場合もあるが、かけない場合もある。

- ・サポートしてくれるのが学生であることのメリットは、何かあるか？

大学の事務窓口や学生相談、保健センターのカウンセリングがあるが、それとは違う窓口として、ピア・サポーターが、いることの意味があるのではと、学生と接してみて思う。

広島大学におけるピア・サポート

広島大学 保健管理センター 准教授 内野 恒司

分科会第2 学生同士の支えあいを促進し、
コミュニティを元気にする学生支援
～学生の居場所としてのピア・サポート～

2014.02.23

広島大学におけるピア・サポート



広島大学ピア・サポート・ルーム
広島大学保健管理センター
内野恒司

なぜ広島大学においてピア・サポート・ルームが設置されたのか？

- ◆ 都市から郊外へのキャンパス移転
 - ・キャンパス周辺の社会資源の不足
- ◆ 学生相談の多様化
 - ・それに伴い専門相談窓口が増えたために、どこへ相談に行くのが適切かわかりづらい
- ◆ ピア・サポートへの関心
 - ・非専門家あるいは当事者自身の潜在的な能力を対人関係援助に活用する動きが高まった
 - ・H12年度レポートの「学生中心の大学」への視点の転換、「正課外教育の積極的な捉え直し」を受けて、「学生の活用」に対して全般的な取組みの機運も高まつた

ピア・サポートの起源

Carr,R. 2001 The Theory and Practice of Peer Helping. Peer Resources.

1. 青年期における相談相手の多くは、友だちである
2. 支援技術のトレーニングは、ピア・ヘルパーの心理的成長を促す
3. 青年が直面する主要な問題は友だち関係である
4. 一次予防的效果がある
5. 青年は受け止め理解してくれる他者としての青年を必要としている
6. 青年には自律・自立の欲求がある
7. ピア・グループの相互作用は建設的な力をもつ
8. セルフ・ヘルプや相互援助グループの活動がピア・ヘルピングの基盤となっている
9. ピア・ヘルピングは、コストや専門家の利用可能性に基盤がある

学校におけるピア・サポートの考え方

1. 自助を基本とする（セルフ・ヘルプ）
2. 学生がお互いに助けられるよう支援する（ピア・ヘルピング）

大学におけるピア・サポートのサブカテゴリー

Hatcher,L. 1995 Peer Programs on the College Campus. Resource Publications, Inc.

1. Peer counseling
カウンセリングのコミュニケーションスキルを用いた相談活動
2. Peer education
アルコール、ドラッグ、セイファーセックス等についての教育啓発的活動
3. Peer advising
進路や就職等について体験者による相談活動（傾聴を基本とし自己決定を促す）
4. Peer teaching
先輩による学習支援
5. Mentoring
メンターと呼ばれる指導者との対話によるメンティー（プロフェッショナル）の自発的・自律的発達を促す

ピア・サポート・ルーム設置目的

設置要項第1条

学生が、学生生活上の諸問題に対処するに当たり、気軽に相談し、互いに助け合う学風を醸成することをめざして、学生ボランティアが学生の相談に応じる部屋を設置する。

広島大学ピア・サポート・ルームとは？

- ・学生による 学生のための 何でも相談室
- ・2000年4月 設置 * 今年度で14年目
- ・トレーニングを受けたピア・ソポーターが、ピア・サポート・ルームを訪れたピアさんの相談を受ける
- ・学生が充実した大学生活を送れるようにサポート活動をしている

実際の相談活動

・場所

学生プラザ4F ピア・サポート・ルーム
(学部1年生が教養科目を受ける講義棟の近く)

・時間

月～金 12:00～16:00 (長期休暇中は休室)

・待機

-ピア・ソポーター (シフト制:週1回1コマ)
-常駐専門アドバイザー (週3日)

相談形式



- ・1対1
- ・相談無料、秘密厳守
- ・予約不要、開室中隨時受付
- ・必要に応じて学内外の専門相談機関を紹介



相談の流れ

STEP1: 問題の明確化

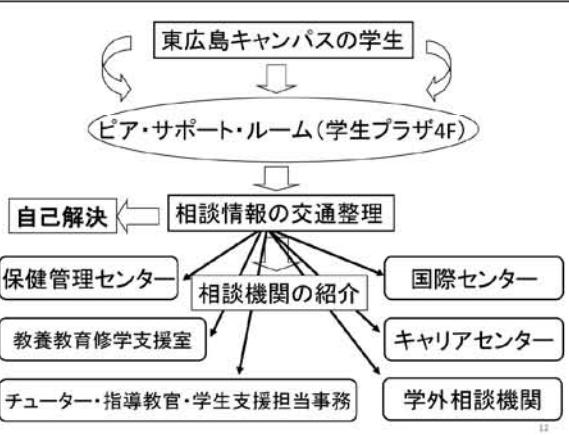
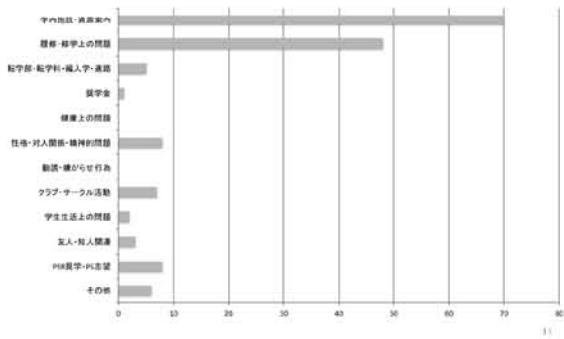
STEP2: 選択肢の模索

STEP3: 情報の提供

STEP4: 行動の計画

問題解決

2012(H24)相談内容



発足2、3年間の問題

- ・相談件数が少なく、PSの意欲の低下
- ・待機中のすごし方
- ・ピア・サポートは、何をどこまでやるのか
- ・PSの活動への関与に温度差
- ・一定数のPSの確保が困難
- ・一部のPSに精神的問題が顕在化
- ・教員主導で始まったので、PSの能動的動きが少ない
→ フラストレーションが高まっていた

13

新たな活動の展開

1. 新入生に対するサポート活動
2. 部局制の導入(役割分担)
3. 養成セミナーの方式変更
4. 新入生住宅斡旋時の支援開始
5. 養成セミナーのトレーナーをPSが務める
6. ランチアワーを設ける
7. 大学祭での出店
8. 学生プラザへの移転
9. メンタリングプログラムの開始
10. 編入生相談会の開始

14

ピア・サポートーになるには？

- ◆<基礎編> 学生生活概論(1セメスター)
- 様々な相談機関の講師による講義
 - 消費生活、破壊的カルト、応急処置、こころの健康、やる気が起きなくなる時、セルフヘルプ、からだの健康、性行動の安全と危険、コミュニケーションのとり方など

◆<実践編>

 - 援助的コミュニケーション技法
 - 倾聴技法
 - 質問技法・反復・感情の反映・要約技法
 - 実際の相談場面を想定したロールプレイ

15

6年目からの養成システム ピア・サポートーになるには？

基礎編

1セメスター講義: 学生生活概論受講(4~7月)

実践編

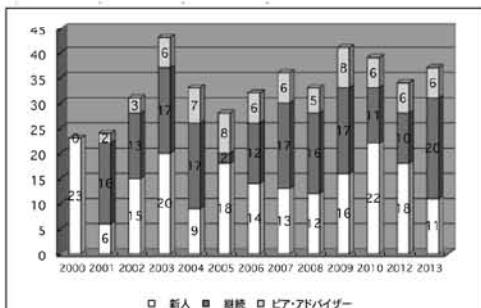
夏合宿(9月)
12時間ビデオ補講
12時間土曜セミナー(10~11月)
12時間

直前セミナー 6セッション12時間(3月)

ピア・サポートーの認定 = 認定証発行(4月)

16

ピア・サポート・ルームの組織



17

PSによる活動評価(2011年度、12年目)

活動の重要度順位と評価平均点 (Empowerment evaluation)

活動内容	実施回数	評価平均点
養成セミナー	直宿、土曜セミナー、直前セミナーにおけるセミナーの実施回数	6.2
運営会での新たな取組み・改善	企画について提案した回数	6.0
実験	実験での実績	7.3
部員会活動	部員会の件数	7.1
部員ノートの作成	自己紹介セミナーの作成	6.0
実験セミナー	企画書	6.8
内勤での支度	実施打ち上げ(ペーパー会議)	7.0
プロジェクト	ナレッジ(?)	6.0
情報・情報	学生生活誌での講座	7.2
タスクワーク	大学生涯じめのわざ参加	7.3
相談室の更新	シラバスのロールプレイ	6.3
外勤実習	内勤セミナーやセミナーなどの交換実習参加	7.1
監修理解会	組討討論(キャンパスリーダー)、課題討論(次文、次大)	6.7
	監修討論(次文、次大)	6.9

1)養成セミナーに対する活動評価 (Empowerment evaluation)

- <養成セミナー評価平均点=8.2(10点満点)>
- セミナーについて自分たちで考えてマニュアルを作成した
 - 準備を充分に行つた上で、実施したことで充実した内容になっていた
- <改善に対する意見>
- (プログラム)担当者は意義を問い合わせてきたが、他のセッションは受け身になっていた
 - プログラム代表者に負担がかかっていたため、もっと役割分担を行う必要性がある

19

2)運営面での新たな取組・改善に対する評価

- <運営面での新たな取組・改善評価平均点=8.0>
- それまでの経験の蓄積をもとに、自分たちで改善すべきことを考えて新たな取組を行ったこと
- <改善に対する意見>
- 意見や情報が共有されていないこと
 - 来年は4年生のPSが少ないため、新たにPSになる人に先輩から今年の新たな取組などを行った経緯などを教えていかないといけない

20

3)相談活動に対する評価

- <相談活動評価平均点=7.3>
- 相談者のニーズに合った活動ができていたこと
- <改善に対する意見>
- 本室相談の数は増えても、絶対数としてはそれほど多くない
 - 相談件数を増やすために広報の工夫や来談ニーズを開拓する新たな取組をもっとすべき

21

4)部局の活動に対する評価

- <部局の活動評価平均点=7.1>
- PS個人あるいは部局の仲間で役割が達成できていた
- <改善に対する意見>
- 部局のミーティングに人が集まらない
 - 少人数だから仕事が偏るところがあった
 - 他の部局が何をしているのかわからない

22

2011年度活動評価についてのまとめ

- 活動が12年目を迎える、活動の基盤が形成され、活動が持続的に行われている
 - PSAを行う上で、組織や活動を持続させ、PSのモチベーションを維持・向上させること、人を援助するための技術やコミュニケーション力、PSの主体性が重視されていた
- <課題>
- PS間で活動や取組についてコミュニケーションを図り、情報や認識をいかに共有して行動するか
 - 活動や運営を自分たちで吟味しながら、マンネリ化を避けいかに活性化させるか、継承するか
 - PSと専門アドバイザーの間で依存と自律・自立の課題もあり、学生と教職員がいかに協働してPSAおよびその教育的価値をさらに発展させるか

内野地: 広島大学ピア・サポート・ルームの活動評価についての考察 - 2011年度活動のEmpower Evaluationを通して -
広島大学保健管理センター研究論文集「総合保健科学」(29)13-23, 2013.

23

ピア・サポート活動の意義1

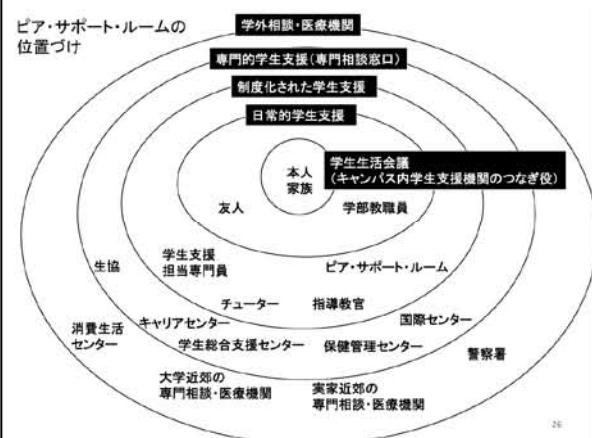
- 学生生活上の問題を抱えた学生に対し、カウンセリングの技法を用いて相手の問題を明確にした上で、必要な情報を提供をしている
→情報の交通整理、ガイダンス機能
- 直接専門相談機関に行くことがなかった学生に対して、学内の二次相談窓口（どこが適切な相談場所かを知るために相談）の役割を果たしている
→専門相談窓口へのリエゾン機能
- 友だちでも専門家でもなくピアという立場で相談を受け理解し話し合うことによって、助け合いの学風が醸成され、先輩が後輩のモデルになる

24

ピア・サポート活動の意義2

4. サポートネットワークの広がりが促進される
→キャンパスコミュニティの発展
5. サポーターのコミュニケーション技術や支援技術が発達
→情けは人のためならず
6. ピア・サポーターは、自分が人にどのような影響力をもつかを学ぶ
7. ピア・サポート活動は、心理的発達を促進する教育的活動であると位置づけられる

25



26

ピアサポート活動における難しさ

- ・相談にのることの難しさ
 - 技術的な問題 → 継続研修
 - 責任、倫理的問題 → スーパービジョン
- ・プログラムを維持することの難しさ
 - 相談件数の多寡
 - PSの養成 → 新たな試み
 - PSの主体性向上 → 活動の活性化

27

今後の課題

- ・ピア・サポート・ルームをキャンパスに定着させ、来談学生を増やしていくためには、どのような工夫ができるか？
- ・モチベーションの維持とPSの主体性を高めるためには、PSと専門アドバイザーとでどのように協働したらよいか？
- ・他大学との交流を増やすにはどうしたらよいか

28

質疑応答

- ・導入にあたってモデルとしたものがあるか。どのように配慮したか。
 - カナダのブリティッシュ・コロンビア大学の情報があるにはあったが、広島大学の実情に合わせてピア・サポート・プログラムを企画、準備、実施した。
 - サポートの主な役割として傾聴することで問題の整理と、必要に応じて専門相談機関の情報提供を行うこととした。
 - 教職員の中には学生が学生の相談にのることへの危険性を危惧する声があった。それに対しては次頁のような説明を行った。
 - 学生にもピア・サポーターとしての役割と限界、ボランティアとしての倫理等についての説明、ロールプレイングを通じた援助的コミュニケーションの研修を行った。

29

ピア・サポートに対する疑問や誤解への説明

1. 専門家によるカウンセリングとの違い
学生によるセラピーではなく、アドバイスを与えるものでもなく、おもに傾聴によって、相談者の自己理解や自己決定を促す。必要に応じて相談者を専門相談機関へ紹介するようトレーニングされている。
2. ピア・サポーターはトレーニングを受けて認定される
援助的コミュニケーション・スキルを学び、認定を受ける
3. ピア・サポートの目的や範囲・限界(scope),倫理等について学んでいる <実践の試行錯誤で学ぶ>
4. スーパービジョン(専門家によるバックアップ)を受けながら支援を行う
5. 開始・導入に際しては、プログラムの具体的な適用例を示すことが有効

30

ピアサポート「S café」の紹介

京都教育大学 保健管理センター 教授 森 孝宏

ピアサポート 「S café」の紹介

学内教育研究改革・改善プロジェクト採択(学長裁量経費)
新学生支援アクセス・Scafé(エス・カフェ)

京都教育大学保健管理センター
森 孝宏



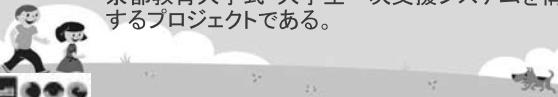
S caféプロジェクトの始まり

待ちスタイルの保健管理センタ一面談
以外の学生のアクセスの必要性から
平成24年度の学長裁量経費31万円を
取得し始まった。



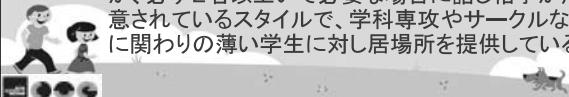
プロジェクトの概要

- 養成された学生相談員ピアソーターによる、新たな学生支援アクセスScaféの運営により、学生課や教員、保健管理センターへの相談までにつながっていない初期困難学生の早期発見と早期介入及び正規の学生支援ルートに事例受け渡しを主な活動とする、学生による学生のための京都教育大学式・大学生一次支援システムを構築するプロジェクトである。



プロジェクトの特色

- 半期をかけて養成したピアソーターにより、毎水曜日午後の3・4時限Scaféを開業する。Scaféは、アクセスしやすいよう予約なしで自由に来所でき、コーヒー・紅茶・お茶などが無料で提供されている。自分で御菓子を持ち込んだり、本を持ち込んだりしてもよい。トランプなど、関係の必要となるアナログゲームも用意されている。そこではピアソーターが、必ず2名以上いて必要な場合に話し相手が用意されているスタイルで、学科専攻やサークルなどに関わりの薄い学生に対し居場所を提供している。



プロジェクトの意義

- 孤独感を感じた学生や、教職員に相談するまでに至らない不全感などを持つ学生、専攻やサークルなどに帰属感の薄い学生に対して、学内の居場所を提供する。加えて同じ学生の立場での助言や支援をピアソーターに求めることができるアクセスを保証する。



Scaféの立ち上げと運営の経過

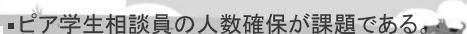


第1段階 ピアカウンセラー養成

■平成24年度は、6月からマイクロ・カウンセリング講義4回、カウンセリング実技演習ロールプレイ逐語記録分析5回、メンタルヘルスや発達障害支援等の講義を行い、合計90分12回で単位なし参加料は無料で実施した。12名で養成を始め、最終的に相談員認定をしたのは3回生8人、2回生2人計10人で、9月から2人でScaf 担当を開始した。

■平成25年度は、前期2名、後期2名で養成を始め相談員認定が3名である。

■ピア学生相談員の人数確保が課題である。



第2段階 Scaf の準備

■会場設定：大学会館1階談話室（オープンスペース）

■雰囲気作り：試行錯誤（パーテーションしたり、個室的にしたりしたが、結局オープンになってしまった）

■カフェ用物品購入：湯沸かしポット、使い捨てコップ、ペット飲料、お茶やコーヒー豆、砂糖、ミルクなど。なお菓子など食べ物は会計上購入できなかった。

■必要物品購入：ICレコーダー2台、ノート、筆記用具類、トランプなど



第3段階 Scaf の運営

■平成24年度後期の現状紹介

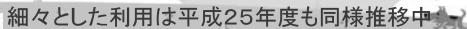
■Scaf 運営実績：後期毎週水曜日午後各4時間15回合計60時間、毎回2名ピア学生相談員が担当（時給800円の謝金あり）後、SVを受けて解散している。

■Scaf 利用者状況：総利用者数：15人平均毎回1名（2日、3日利用者各1名、実数12名）

■学年内訳：4回生2名、2回生10名、1回生3名

■性別：女性10名、男性5名

■細々とした利用は平成25年度も同様推移中



ピア学生相談員の感想

■大久保圭介教育学専攻3回生：授業のため相談員養成講座の日程が難しかった。ロールプレー逐語記録分析を中心とするカウンセリング演習がためになつた。

■吉田瑛里教育学専攻3回生：Sカフェ取り組みの周知、実際の場づくり、運営が難しく試行錯誤してきた。世話話や、趣味の話、恋愛相談、愚痴などを聞いてきた。雰囲気作りをこれからもしていきたい。

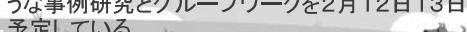


第4段階 元気回復セミナー実施

■平成25年度から夏春年2回、学生対象の自己効力感や対処能力の増進を目的とした2日間セミナーを開催し、臨床心理士養成課程修士1年の大学院生にピアサポートを依頼している。

■夏は認知行動療法に準拠した自信回復プログラムで、参加者は1名のみ（8月12日13日という日時設定が反省材料）

■春は教育実習等の人間関係のモデル学習となるような事例研究とグループワークを2月12日13日に予定している。



ピア大学院生相談員の感想

■田口朋大学院学校教育学専攻教育臨床心理学コース修士1回生：夏は認知行動療法による自己効力感向上のための演習を、冬は、教育現場で追いかまれる教師の事例を検討し、認知や対処行動を再検討する演習をした。参加者から来てよかったといわれて、自分も元気が出た。



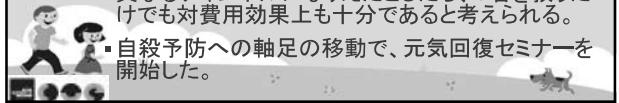
第5段階 Scaf の成果

- 平成25年度の現状紹介
- Scaf  利用者状況: 総利用者数: 27人 平均毎回1名
- 元気回復セミナー利用者状況: 総利用者数のべ3名



プロジェクト課題

- 平成25年度は通常予算30万円で実施しているが、支出は主に相談員の謝金と研修代、新しいプログラムのための研究費である。利用者が毎回1名程度であり、利用者1人当たり5000円程度の費用を掛けていることになる。対費用効果の判断は難しい。
- 既設の相談システムでノーマークだった自殺学生がでた。ピアサポートシステムがそうした学生への異なるチャンネルになりえたとしたら、1名を救うだけでも対費用効果上も十分であると考えられる。
- 自殺予防への軸足の移動で、元気回復セミナーを開始した。



同志社大学における「ぴあ」サポート制度について —特色 GP 「大学コミュニティーの創造」との関連から—

同志社大学 学生支援機構 学生支援センター 京田辺校地学生支援課 学生支援係長 河村 秀明

今回のフォーラムでは、同志社大学における「ぴあ」サポート制度の概要と導入後 10 年が経過しての成果と今後の課題について、平成 16 年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」（以下、「特色 GP」）と申請、採択、事業終了後の流れで報告した。

①平成 16 年度「特色 GP 大学コミュニティーの創造」申請の背景

本学は平成 16 年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」に採択された。この特色 GP の採択が現在の「ぴあ」アシスタント制度の礎となっている。

ここでは、特色 GP 申請の背景、課題解決のための学生支援センター設立やその後の学生部との統合といった組織改編について話した。当時の大学生を取り巻く状況は国際化、情報化の進展に反比例するかのように個人の孤立、無関心、不寛容が増大し、縦横いずれの人間関係も希薄化し、他者との触れ合いや葛藤を通じた精神的な成熟という点で困難な状況であった。この状況は、当時の自治会選挙における学生の投票率の低さからも明らかであった。この状況の中で、2004 年 5 月に学生部と学生支援センター（2002 年開設）を統合し、学生支援、学生の自律支援に本腰を入れることとなった。

②「特色 GP」採択 —学生の自律支援についての 3 つプロセス、プログラム紹介—

前述の通り 2004 年に「大学コミュニティーの創造—コミュニケーション・デバイドの克服—」というテーマでプロジェクトが採択された。このプロジェクトでは学生の自立支援を「インキュベート（育成）」「共存・交流」「成長・拡がり」という 3 つのプロセスに分けており、報告では「成長・拡がり」にフォーカスし、オリエンテーション期間中のぴあアドバイザーについて発表した。参加者からは研修の方法やぴあアドバイザー制度に教員がどのように関わっているのか、教務部門との摩擦をどう解消したかについての質問があった。本学のぴあアドバイザー制度については職員のみで研修およびオリエンテーション本番を担っている。制度が始まって 10 年経過しており、研修においても「先輩が後輩を指導する」というぴあの目指すべき姿が浸透している。試行錯誤を繰り返すうちに教務部門との連携も進んだ。その他、ぴあアドバイザー経験者の就職状況についても質問があった。

③「特色 GP」事業終了後 —成果と今後の課題—

最後は成果と課題について発表した。当初の目的どおり、学生が「支えられる側」から「支える側」へという循環が生まれ、「成長スパイラル」が実現できた。また、この活動を通じて学生が大学コミュニティーの一員であるという意識も高まったことは大きな成果である。しかし、2013 年に本学のキャンパス再編事業で文系の学部 1,2 年次生が京田辺キャンパスから今出川キャンパスへ移動したことで、新入生が一同に会する機会がなくなった。2 拠点化された大学におけるぴあアドバイザーの運営体制の確立については急務である。

この課題解決に向けて、広島大学、京都教育大学、法政大学の取り組みは大変参考になった。あわせて、参加者の方々からもたくさんのアドバイスをもらうことができた。今回このような機会を持つことができたことを心から感謝したい。

以 上

同志社大学の「ぴあ」サポート制度について
特色GP「大学コミュニティーの創造」との関連から

同志社大学学生支援センター
京田辺校地学生支援課学生支援係
河村 秀明

本日お話しすること

1. 特色GPについて
2. 本学のぴあサポートについて
3. ぴあサポートの成果と課題

本日お話しすること

1. 特色GPについて

特色GPについて

特色GP申請の背景

- ・大学生を取り巻く環境の変化。個人の孤立・無関心・不寛容。
- ・1999年以降、自治会選挙の投票率の低下にみる自治意識の希薄化。
- ・京田辺1.2年次、今出川3.4年次という分離状況が自治意識の希薄化に拍車をかけている状況。

コミュニケーション・デバイド

2002年 学生支援センター設立
2004年 学生部と統合された学生支援センター設立

特色GPについて

```

graph TD
    subgraph 2002 [2002年～2004年4月]
        A[学長] --> B[学生部]
        A --> C[学生支援センター]
        B --> D[学生課]
        B --> E[厚生課]
    end
    subgraph 2004_5 [2004年5月～]
        F[学長] --> G[学生支援センター]
        G --- H[今出川校地学生支援課]
        G --- I[京田辺校地学生支援課]
        G --- J[スポーツ支援課]
    end

```

特色GPについて

特色GPについて

平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム」
大学コミュニティーの創造
—コミュニケーション・デバイドの克服—

- ・「学生が学生を巻き込む」
- ・支えられる側だけでなく、支える側の学生の教育効果

その当時では斬新な取組

2. 本学のぴあサポートについて



本学のぴあサポートについて

本題に入る前に…

学生の自立支援の3つのプロセス

```

    graph TD
      A[インキュベイト(育成)] --> B[自己分析]
      B --> C[共存・交流]
      C --> D[実戦の段階]
      D --> E[成長・拡がり]
      E --> F[コミュニケーションへの還元、シェア]
  
```

本学のぴあサポートについて

「ぴあ」はどの段階？

成長・拡がり

ぴあアドバイザー制度
在学生による新入生向けキャンパス・ライフ・ガイダンス。キャンパス内の道案内から簡単な履修相談まで、約50時間の研修を受けたスタッフが対応。活動について有機。



ぴあメンター制度
先輩の立場から、経験を踏まえて下級生の相談に応じるボランティア。
EX) ◆早稲田大学交換留学 ◆海外私費留学
◆転学部・転学科 ◆大学院
◆異文化交流



本学のぴあアドバイザー制度について

ぴあアドバイザーの研修（2013年度実績）

2月中旬	顔合わせ、アイスブレイク、ぴあネーム決定
3月11～12日	コミュニケーション・スキル研修（合宿）
3月14日	カスタマー・サービス・スキル研修
パティ制採用 外部講師による研修	
3月18、19、21、22日（4日間のセッション）	マニュアル（時間割モデル）作成、プレゼンテーション ※教務センターおよび免許資格センター職員による説明含む
3月26、27日	シミュレーションおよび準備
4月1日	入学式・オリエンテーション期間に活動

本学のぴあアドバイザー制度について

活動風景（外部講師による研修）




“チームビルディング” “他者相互理解”

▼ 本学のぴあアドバイザー制度について

活動風景（時間割モデル作成、シミュレーション研修）



バディ制導入

研修期間中、先輩後輩で一定のペアを作り、ワークや振り返りを行う。

▼ 本学のぴあアドバイザー制度について

活動風景（時間割モデル作成、シミュレーション研修）

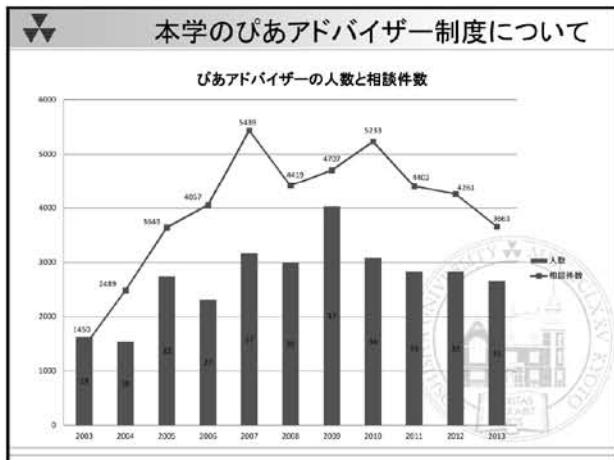


バディ制導入

先輩ぴあが後輩ぴあに指導・助言し、関係性を強めることで「ぴあアドバイザー」としての意識を高めていく。

▼ 本学のぴあアドバイザー制度について

活動風景（オリエンテーション期間本番）

▼

3. ぴあサポートの成果と今後の課題

▼ ぴあサポートの成果と課題

ぴあサポートの成果

- ◆ ぴあを経験したこと、「大学コミュニティー」の一員としての意識が高まった。

Q. 同志社大学というコミュニティーの一員として役割を果たせたか？

A. 「充分果たせた」が56%、「まあまあ果たせた」が44%

Q. ひあの経験は、今後の大学生活で新たな活動をするきっかけとなりましたか？

A. 「充分そう思う」が77%

- ◆ オリエンテーション期間の窓口混雑の緩和

◆ ぴあアドバイザーに支えてもらった新入生が翌年新入生を支える側にまわる。（＝「成長のスパイラル」の実現）

△ ぴあサポートの成果と課題

ぴあサポートの今後の課題

2012年度までは文系（一部除く）学部と理系学部の1、2年次生がすべて京田辺キャンパスで学んでいた。

学部 学年	1・2年次	3・4年次
神・文・社会・法・ 経済・商	京田辺	今出川
文情・理工・生命・ スポーツ・心理	京田辺	
政策	今出川	

△ ぴあサポートの成果と課題

ぴあサポートの今後の課題

2013年のキャンパス再編により、文系学部の1、2年次生が今出川キャンパスに移動した。（大学の2拠点化）

学部 学年	1・2年次	3・4年次
神・文・社会・法・ 経済・商	今出川	
新しい運営方法の確立		
政策	今出川	

△ ぴあサポートの成果と課題

ぴあサポートの今後の課題

実働期間がオリエンテーション期間しかなく、短い

↓

オープンキャンパスやキャンパスフェスタ（＝地方版オープンキャンパス）など、年間を通じての活動を検討。

↓

1年間を通じて「学生目線」でのプログラムを企画・立案できる学生チームとして活動してもらいたい。

目標

△

ご清聴ありがとうございました

同志社大学京田辺校地学生支援課
河村 秀明



第3コミュニティを創出する「ピア・ネット」

法政大学 経営学部 教授 学習ステーション長 木原 章

第3のコミュニティを創出する 「ピア・ネット」

法政大学・学習ステーション長
木原 章

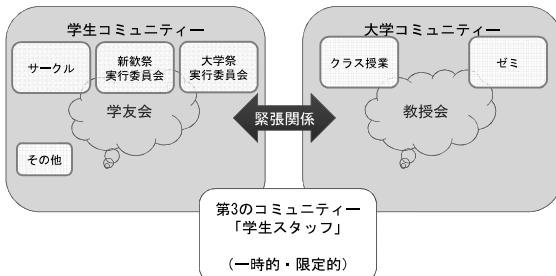


学生スタッフの立ち上げ

- ・新入生合宿（2000年）
 - 新入生34名（2010年 125名）
 - 学生アドバイザー7名（2010年 20名）
- ・オープンキャンパス（2002年）
 - 在学生による相談コーナー 延94名（2013年 約400名）
- ・新入生サポーター（2007年）
 - 相談件数 約90件（2013年 約1300件）
 - 14名（2013年 約30名）



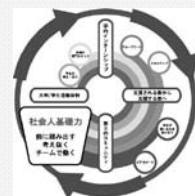
当時の「学生コミュニティ」



2007年度 学生支援GP 「学生の力」を活かした学生支援体制の構築

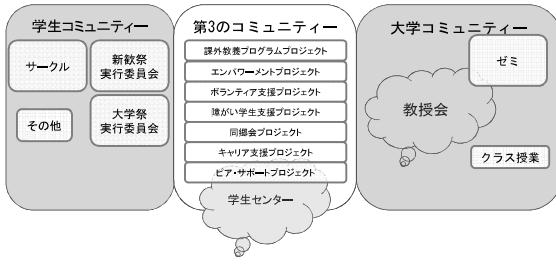
「ピアサポート・コミュニティ(PSC)」の提案(2007年)

- <コンセプト>
- ・教職員と学生の協働体制
 - ・第3のコミュニティ
 - ・支援される側から支援する側へ
 - ・学内インターンシップ



- <基本的なスキーム>
- ・学生スタッフを運営の中心に位置づける
 - ・部局の垣根を越えた連携

新しく作られた「コミュニティ」



PSC「障がい支援プロジェクト」

- ・ミッション: 学内の「障がい学生支援体制」を構築する
- ・初期構成: 手話サークルなどの障がい者支援の意欲のある学生
- ・活動: 障がい学生支援室の設置を提言 => 2008年度 実現（学生センターから離脱）
- ・その後:
障がい学生支援室学生スタッフとして、正課授業のノートテイクを行う。
正課以外の活動が消滅
学生アルバイト化



PSC「キャリア支援プロジェクト」

- ミッション：就職活動を終えた上級生が、下級生をサポートする。
- 構成：内定を得た4年生が参加
- 活動：
キャリアセンターの研修の元、学生の就職活動の相談員として活動。学生発案のプログラムを実施
- その後：
ほぼ、相談員としての地位を確保。研修などもシステム化され、大学業務に組み込まれた形
学生スタッフに取っては、一種の社会人研修の機会

PSC「同郷会プロジェクト」

- ミッション：「都道府県人会」の設立を目指す
- 初期構成：地方出身者の学生を公募(100名以上が登録)
- 活動：「たまり場」の確保、大学祭参加、コアスタッフ(約2~4名)のみの活動、サークル化
- その後：
担当職員の異動と、初期メンバーの卒業で消滅。
サークル化によって、ミッションが消滅した。

PSC「ボランティア支援プロジェクト」

- ミッション：学内の「ボランティア支援体制」を構築する。
- 初期構成：ボランティアサークルから有志を募った
- 活動：ボランティアセンターの設置を提言=>2009年度 実現
2011年 震災ボランティア「チームオレンジ」を結成
- その後：
ボランティアセンター実施プログラムの補助
学生プログラムの実施(プログラム数の減少)
ボランティアサークルのサポート(連携の縮小)

PSC「課外教養プログラムプロジェクト」

- ミッション：授業では体験できない「プログラム」を企画・運営する。
- 構成：プログラム参加者から企画・運営スタッフへ
- 活動：定期的なプログラムを実施
プログラム実施のためのPDCAサイクルの構築
学生センターの手厚いサポート
- その後：
継続的に活動を続けている。
PSCの優等生

ピア・サポートとコミュニティー

- 大学におけるピア・サポート
お友達の支援 => サークル化 => 長時間化
他人の支援 => 業務化 => 効率化
- 大学におけるコミュニティー
(嗜好が有った仲間のコミュニティー 「気の合う友人」)
嗜好が特化したコミュニティー 「サークル」
教育プロセスのコミュニティー 「ゼミ・クラス」=>学部コミュニティー
(業務上のコミュニティー 「部局」)

ピア・サポート・プロジェクト実現のコミュニティー 「第3のコミュニティー」

第3のコミュニティーの在り方

- サークル化せず・業務化せず
 - 業務性を担保つつ、効率化しないプロセスの確保
 - 「効率化」できない要素(「効率化」で失われる要素)の洗い出し
「ピア・サポート制度の3つのメリット」(沖ら 2011)
 - ①支援される側の学生の成長
 - ②支援する側の学生の成長
 - ③支援する側の学生をSuperviseしたときの教職員の成長
- 継続性の担保
 - プロジェクトの継続性が担保されない限り、コミュニティーの継続も無い
- 居場所の担保
 - 部局拠点を持たないコミュニティーの存在場所の確保

学生スタッフの新たな展開

2012年

ピアネット

東大谷キャンパス
学生スタッフの学部内コミュニティー
ピアネット（HIGASHI MURAYAMA）

中井キャンパス
研究室中心の学部内コミュニティー

東大谷キャンパス
ゼミや中心学部内コミュニティー

小金井キャンパス
研究室中心の学部内コミュニティー

ライブラリー・ソーター（2008年～）

- ミッション：図書館サービスに対する評価・選書
その他のプログラム実施
- 構成：公募したスタッフ
- 活動：年間数回のイベント実施

学生コミュニティー 第3のコミュニティー 大学コミュニティー
ライブラリー・ソーター

サイエンス・コミュニケーション・スタッフ（2007年～）

- ミッション：文化系の学生として、同じ文系の学生や高校生に対して、サイエンス・コミュニケーション活動を行う。
- 構成：公募したスタッフ
- 活動：毎月定例会開催
オープンキャンパス・法政フェア等に参加
サイエンス・アゴラに参加

学生コミュニティー 第3のコミュニティー 大学コミュニティー
サイエンス・コミュニケーション

学習ステーション開設（2011年）

ピアサポート（仲間同士の助けあい）を取り入れた、全く新しい学修サポートセンター

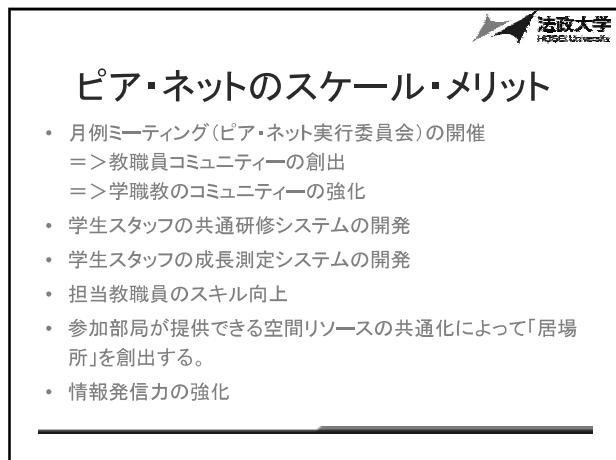
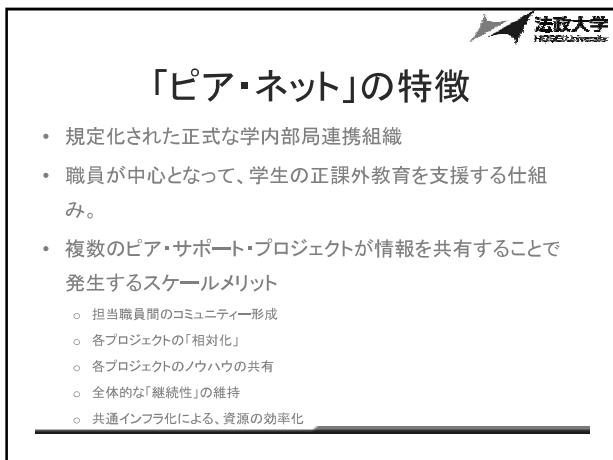
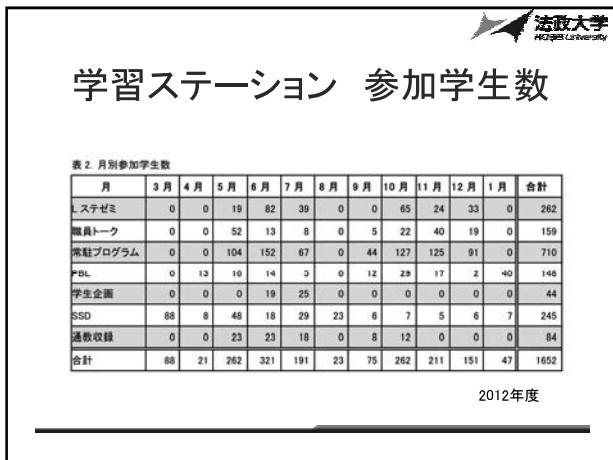
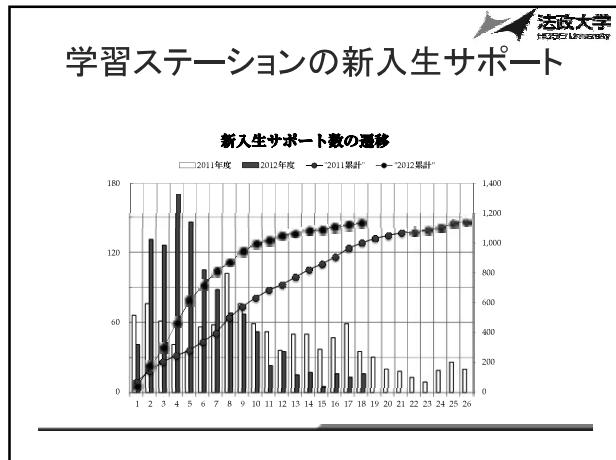
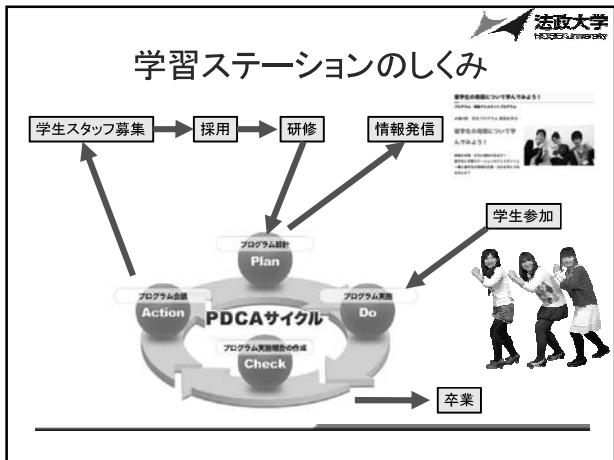
- 大学に入ったけれど何を勉強してよい
か判らない
燃え尽き症候群
- 学部のカリキュラムにフィットしない
不本意入学
- そもそも勉強のしかたが判らない
学力不足

学習ステーションの役割

- 学部を超えた学びの場を作る事で、幅広い学びのきっかけ作り（「学びの出会い」）
- ピアサポートによる学習サポートの開発
 - 従来型
「楽勝科目の伝授」「ノートの貸し借り」
 - 学習ステーション型
学び合いによる問題解決・学びの習慣づけ
（その「問題」とは？）
- 学びのニーズの発見→正課への波及

学習ステーションのコンテンツ

新入生サポート 4月のガイダンス期間を中心に、主として時間割作成相談を実施。
レステゼミ 教員が昼休みに行う30分のショートゼミ。
職員トーク 最も身近な社会人と気軽に懇談。
学生ブログラム 月～金の3～4回に開催される、常駐学生スタッフによる様々なプログラム。
企画スタッフ・プログラム 学生企画スタッフが、昼休みなどの空き時間に開催するプログラム。
レステプロジェクト 学内出版物や、学内事業を学生プロジェクトとして実施しています。



学生スタッフ共通研修システム

- コミュニケーション・チームワーク研修
- 社会人基礎力テスト

学生スタッフ・コンピテンシー・チェック

月	2012年5月	2012年7月	2013年1月
①他者理解力	5	4	3
②配慮力	4	3	2
③柔軟性	3	2	1
④実行力	2	1	0
⑤チームワーク力	1	0	0
⑥主体性	0	0	0
⑦積極性	0	0	0
⑧自己実現力	0	0	0
⑨情報伝達力	0	0	0
⑩発想力	0	0	0
⑪情報分析力	0	0	0
⑫問題解決力	0	0	0
⑬行動選択力	0	0	0
⑭共同行動力	0	0	0

教職員スタッフのSD

- PDCAサイクルの構築
 - プラン
 - 実施
 - 実施報告
 - 検証・アクション(実行委員会)
- 定期的な対外的報告書の作成
 - 2012年「法政大学教育研究」
「学生支援GP『学生の力』を活かした学生支援体制の構築」の検証と「学びのビア・サポート」への展開
 - 2013年「法政大学教育研究」
法政大学におけるビア・サポートとしての学生スタッフ育成の現状と課題
(受理)

部局連携による居場所の演出

各部局の窓口に、ミニのぼりを設置。

情報発信力の強化

- 共通ウェブサイトの構築
- ニュースレターの配布
- 「ピア・ネット ガイド」の作成

法政メソッドの確立

- プロジェクト毎の成長項目・目標を定めた効果検証システムの確立

大学生の上げとての力	問題理解・発信力 創造的思考力	学習ステーション
学習上必要なスキル	数理的スキル 情報リテラシー 論理的思考力	学習ステーション 図書館
市民生活を営むうでのスキル	倫理観 社会的責任 問題解決力	課外教育プログラム ボランティアセンター
社会人としての教養・選択	多文化・異文化との接點と理解 日本としてのアヤシマツバヤ 法政大学人としてのアヤシマツバヤ	課外教育プログラム
学生生活に必要な力	コミュニケーションスキル チームワーク リーダーシップ アーチンジ マネジメント	課外教育プログラム ボランティアセンター キャリアセンター



ピア・ネット・コミュニティーにむけて

- ・ピア・サポートの3つのメリットを把握し、業務性ばかりに注目しない「ペース配分」の確立
- ・共通インフラ化による、「効率化」
- ・新規参入の拡大
- ・支援を受ける学生の「満足」
- ・支援をする側の学生の「満足」
- ・教職員スタッフの「満足」
- ・学職教のバランスの取れたコミュニティーの形成へ



